

牛馬は好しうるはしきものにては到底其の雅致を競ふこと能はず又犬猫は栗鼠山羊などの趣多きに如かず比較的猫は他の家畜よりは人間に離れざる制限 (Human Imitation) の痕跡甚きが如し何となれば猫は人の飼養を受け人の寵撫をば甘じて受けながらも隠然ちのれの特徴を嚴守して移らず恰も人工をもて飾り成せる花園の中を一條の溪流の走るが如く彫琢練磨せる人間の生活に立ち交りながら依然其の自然の特質を保つ。

此の制限なるものは一時偶然に存するにはあらず人間進化の必然の條件として殆ど人事の一般を蔽ふものなり。人間の智力は本來その特質とするところ分別にあり而して事物の瞭解力と云ふは分類するものに外ならず。されば智力の進歩は直に是れ事物を辨析解剖することの進歩にして瞭解力の無限の發達は即ち是れ無限の分類をなすことに外ならず。人は瞭解力に依りて自他の別を立て固外物と我れとの限界を明に定む而して己れの箇々の目的を分ちて之れを明晰に自家の前に懸く。是れに由て之れを觀れば瞭解力の發達にはあつから無限の制限を合むものと云はざるべからず。他言もて之れを云へば瞭解力とは事物を

断定するものにあらずや而して断定は是れ都て制限にあらざるなし。されば總て人爲に成る事物は他の生活物の境界と意識して分離せる孤立の人界が表現せるものなり否此の孤立せる人生も其の全部が表現せらるるにあらず唯或場合に於ける一時の單獨なる觀念目的を故意に寓したるものに過ぎず。

さて斯かる絶對の制限は高き審美的感納を破壊するものなり蓋し審美的感納は本來自由の感納なり此の理はラスキンが唱へたる如く美術の中に再現せられたる者は内部に於て無限絶對と通ずる門戸を有すとの説にて解くことを得べきなり。

吾人は既に人爲に成れる事物には一種の制限附隨して離れざるが眞なり而して是れには若干の例外あることを云へりき。人爲に成りて而も制限の束縛を脱却するものは至高なる美術の創作物のみなり吾人が例外と云へるは之れを措す。勿論高き美術と雖も自然がつくり出でたるものゝ如く吾人を感動せしむることは難し吾人は茲に二者を比較討究することを爲さじ何となれば這は目下の問題にあらずれば。吾人は至妙なる美術より得來たる感興は或人に取りては自然よ

り得來たる感興よりも強大なることあるは疑はず、されど二者感興の性質を異にするを知らざるべからず。美術にして全く技巧テクニックの痕ありとの感を超絶せしめ得るものは甚だ稀有のことなり、万一全く此の感を脱却せしむる美術ありとするも、這は宗教上の建築物などに限らるべし。自然の美は極致に適へる殿堂の美とは密接の關係を有する由は森林の細道を逍遙する際などに寺院の細き廻廊などをあほろに聯想すれば一段その景色の美感深くなる事實に徴して知るべし。然るに宗教の無關係なる建築物その他の美術と自然の關係は斯くの如きとなし。寺院殿堂などいふ以外の美術にても自然の美に類似せるものなきにあらざれど此等は眞に類似せるにあらず。斯かる別種なる類似のものにも往々趣味あり且吾人の心を喜ばしむるに足るものなきにあらざれど此等は審美的快感の圏外に逸するものなるを奈何にせん。

吾人は今迄自然と詩との關係を消極的方面より論じたり。而して吾人は自然界の活氣に對すれば人生の羈絆も人工の制限をも脱離する所あるを見たり。斯く消極的の方面のみを説きて未だ充分なりとは云ふべからず、何となれば件の脱離は蒼鬱たる森林に於てもはた草木なき砂漠に於ても同様に起こり得ざるにあらざればなり。されば充分に説明するには積極的方面を見ることを要す。吾人が自然界より得來たる悦樂は單に人生の羈絆人工の制限の脱離に止まらず一面に會合する所あり心を空虚するより來たる快感のみにあらざ一方には心を充實する所の原素あり即ち積極的方面を具ふ。

吾人は自然ナチュラに對すれば圓滿なる生命(fullness of life)に接するの思あり茲に圓滿なる生命とは切りて無數の斷片となされざる生命即ち一團をなせるものを云ふ吾人が自然を轉じて人工の範圍に入るに當りてや雜多の思想目的に應じて此の一團をなせる生命を寸斷するを免れず。而して此所に生命ライフとは單に動物植物などの有機的生命のみを指すにあらざ自然その者が全軀既に一團の生命と云ふべし。山嶽河海を眺むるにも花鳥などに對すると等しく一種の生命の存在するを認む。自然の生命は一側より見れば無數の分割を受くるとを免れず何となれば各種の動物各種の植物、箇々の花、箇々の鳥、いづれも相互の間に區別明なり。さは云へ上の如き差別は是れ單に表面の分割に過ぎず自然の諸物其の者にかゝる差

別あるにあらずして傍觀者たる我々の方にて之れをつくるに外ならず。自然の諸物は相互の間に差別を設けることなければ意識的の區別は彼等の方に決して存在することなし。人心を動かすものは箇々分離せるものよりも統一したるものゝ方一層強し。湖河丘陵花鳥草木は一側より見て箇々分離して獨立に存在すと云ひ得べし但し一本の木の葉が一枚毎に獨立の存在をなすと云ふと同一意味にての箇々分離の存在たることを忘るべからず。根本に於ては共同の生命に融合すれども其の表面に見ゆる所のみにては箇々差別ある現象を呈する者なり。更に一步を進めて考ふるに彼の自然の奥底に透徹する共通の生命は直に吾人々間の命根と相聯絡するものなりと云はんとす勿論這は稍漠然たる思想には相違なきも而も眞理なりと信ぜざるを得ず。吾人は單に各個人として分離してのみ存在するにあらず一側に於て自然界に共通する生命の表現に外ならざるを見る。されば自然の美を靜觀して得來たる心の不羈自由の感は一部は上の理由にて説明するを得べし。吾人自然の美に對すれば自己以外に魂飛び去りて我れを忘るゝ境界に入る此の場合に於ては吾人は自己以外の浩大無限脫塵網の生命に魂を

寓すると云ひつべし一瞬時の間此の大生命は我れの中に宿ると云ふも亦不可なし。

されども茲に難問なきにあらず即ち自然に透徹する此の生命は我々人間の生命よりも劣等のものなるか若し劣等ならずと云はゞ無意識アンコンシャスのものが意識コンシャスあるものに優することを是認せざるべからず。果して意識ある者が意識なき者よりも劣等なりと認めらるゝ場合には人間社會に行はるゝ發達の大運動が今日の如く高度に到れるを進歩とは見ずして寧ろ墜落と看做さるべからず奈何せん吾人は之れを首肯する能はず。かるが故に吾人は依然自然の生命は人間の生命に比して劣等の地位にありと主張せざること能はず。されば今まで論じ來たれる方面のみを見ては未だ自然が何故に吾人に悅樂を與へ得るかを説明する能はず。此の悅樂を與ふる所以の根據を充分に討究せんとすれば他の方面より觀察せざるべからず。他言を以て云へば自然を劣等の地位にありと見ることを能はざる他の場合を求めざるべからず。

さて吾人は自然が與ふる悅樂の由來を尋ね其の根據として第一に得る所のもの

は自然の生命は我々各個人の生命を部分として其の中に包含する全分なりといふ事實是れなり。自然には圓滿統合不分離の大生命存す而して無限の企畫無限の約束その中に潜めり完全なる個人の生命の如きは單に此の大生命の所作に出でたる成功の一端に過ぎず。西歐古代の詩人は自然を歎稱して「吾人の母」といふ語を用ふるを喜べり是れ其の故なきとにあらざ。人間が享有する所のものはすべて自然より受けたる者にあらざるはなし斯くの如き甚深の關係あれば驟りて自然に對する時にも之れを愛慕し之れを尊崇すること決して偶然にあらざるなり。

吾人は先きに自然を愛するの考は古希臘羅馬の詩人間にも既に幾分の端緒として見るべき形跡ありしも此の思想の熾んに意識せられたるは近世の事實なる由を述べたりき。希臘羅馬時代の人民も自然を愛せるとは決して疑ひを容れず彼等が自然を以て人間の慈母なりと思惟せるは人の既に知る所なり。ホーマアが詩中にも自然の風光往々點綴せらるゝを見る之れを以ても當時既に自然の美を賞翫するの傾向ありしを窺ふに足る。當時の人々の想像の所産なる神々の中に

て森または水に住まふ者多きが如きも自然を愛するの餘に出でたりと云ふを得べし。自然界に對する感想も近世に至りては一變せりと雖も尙希臘時代の思想をもて活自然を觀ぜんとする者なきにあらざ。ロツツエ(Lotos)の如きは此の古代思想の廢滅を恢復すべき自然觀を得んと欲する者なり。一方よりいへば近世の自然觀は希臘時代のに劣る所ありと雖も他方に於ては昔よりも一層鋭く自然の美に對して快感を意識するやうになれるは眞なり。自然に對する一面の高尙なる見やうは古代のに劣れる卑俗沒趣味機械的なる他面の見やうと並存するを得べきものなり。泰西古代の詩に於ては主として自然を以て人生の背景として歌ふを常とす。希臘人の如きは自然と我れと殆ど一體不二のやうに考へたるの趣あり故に自然より離れたる人間もしは人間より離れたる自然なるものを容易に承認し得ざるものゝ如し。されば當時にありては自然の美彼等が思想及び靜觀の對境として存するよりは寧ろ彼等の思想及び靜觀の中に滯泥して存せりとも云ひつべし。されば泰西に於ては人事の關係を全く離れて自然の生命と美とを充分に認むるに至れるは遙に後のとなり即ち基督教に依りて誘教せられたる思

想界の大變動を経し後のとなり。基督教は一時人心をして嚴肅の極端に傾かしめ偏へに反省苦慮に陥らしめ冷硬にならしめき。此の時代には精神的生活は全く世俗的生活と分離し超然世界の外に立ちて無限に獨立し得るものゝ如く考へられたりき。勢ひ如斯くなれば世上の愛好せらるべき者を一般に輕侮擯斥するに至れり隨うて自然に對しても愛すべき所あるを毫も見出ださざるやうになりぬ。自然界を見て悅樂を感ぜざるのみならず寧ろ嫌惡恐怖の念を抱くの傾ありき。如斯く一旦精神界と自然界と隔絶せるが如き趣を生じたるは是れ昔日よりも兩者の感通和合を更に自在に且熾んにする必要なる準備に外ならざりき。而して其の結果たるや今日の如く自然の美を樂むの時代を誘致するに至れり。按ずるに精神界の一方に傾倒せる人心の勢力は漸く懣かれを生じたりと云はんより寧ろ精神の立脚地漸く鞏固にして之れを圍繞する維多のものに對し反抗してもて其の本領を維持するの必要なきに至り靜に四圍を見廻はすの餘裕を生じ竟に再びそが安處するの地を此世界に求むるに至れり。如斯くして始めて再び精神と自然と一體不二なりとの考を養成するの境域に進めり。一體不二といふと

雖もこの場合は單に人間の精神的領内の一部として之れを包容したるものとはおのづから異なり。否全く之れに反す。内界の精神、外界の自然二者依然對峙して混同せず而も此の對立は決して相拒抗する對立にはあらず。此の對立たるや是れ自然の勢力と美とを眞に觀取する必要の條件なり、詳言すれば精神が自然に對し截然二者の別はありながら尙一體なるものとして調和融合するに必要の條件なり。此の合して而も混ぜざる妙作用に到る變遷の次第を比喻をもて説明せんか。同じ處にて生長せる少年小女は其の課業とするところ遊戯するところ兩者の間に區別なければ殆どこゝにては異體同心の觀ありて互に男女の差別を認めざるの狀態と云ふべし。然るに數年の間わかれたる後妙齡のところほひ再び相會する時には兩者の間に一種の他人氣生じて昔の如く親密ならざるの感を起こすことあるべし。されども一旦此の一種の他人氣を打破する時には昔の睦しき情交を恢復し曾てなきところの愛情が此の新しき關係より生じ來たるなり。右の如き變遷を経て人間は自然を以て吾人が生活の資料を供給する奴僕視するのみを以て満足せず更に之れを以て我れの親しき友となすに至る。茲に到りて

吾人は悲しきときにも嬉しき時にも其の感懐を自然に向ひて語らんとす又自然の方にも胸襟を披いて我々を迎ふるの趣あるのみならず眞に我々の爲に同情を表して或は破顔一笑し或は落涙數行し或は欣舞し或は大息して吾人を慰むるもの甚からず。蓋し自然が斯く悲喜哀観の相を現じ來たるものは吾人の情懐を取りて自然の大生命に寓するに外ならず約言すれば人間の情感を自然が誇張し潤色し之れを山奔水流斷雲落花に寄せて翻譯して現はすに過ぎず。吾人は之れを見て心を和らげ悶を遣り鬱を排して慰宥を得るもの多し。されば自然は人間の朋友としても人間よりは立ち勝りて吾人を扶助する力ある朋友なりと云うて可なり。

吾人は上述の事柄を一層明にするには近世音楽が人生に對する關係の變動を瞥見するの便利なるを信ず。古代の希臘羅馬の頃には音楽と人生との關係は恰も當時自然に對するの關係と最も相似たる者ありき。此の時代に於ては音楽は單に人生の附屬物なり裝飾物なりとせられき。音楽の風格は人の悲喜哀歎の情緒に應じて成り此等の情緒を發表するが然らざれば此等の情緒を刺激するの用に

供せられたり。然るに近世に至りて一旦吾人々間と自然との間に一大罅隙を生じたるは前に説明せるが如し既にして此の罅隙を殆ど故意に填充せんが爲に一種の新見解を創立せり換言すれば一種の新世界を創造せりき而して此の新世界たるや人間の所作に成れるものゝ中にては最も自然界と其の性質に於て親近し又一方に於てはあらゆる自然の事物に比して最も精神界に類似せるものなり。音楽は自然界よりも更に明に人生の希望恐怖煩悶欲求を納受し之れを自然界が吾人に或意味を語る際のものに等しく最も漠然にして且普通なる言葉をもて翻譯して表はすの趣あり。前にも既に説けるが如く音楽は自然よりも更に精神的生命に類似す蓋し道は精神的生命より生じたるものなればなり然れども其の弘通性を具へて自由無制限の質あるは自然その者にひとし。斯く音楽はそれが性質一面自然よりも精神界に近く又他の一面に於ては精神的境界の如く制限の嚴なるものなく頗る自然に近きものあるが故に自然界と精神界との間隙を繋ぐ橋梁となるなり。

吾人は既に自然美の感の起る由來を説きて精神と自然界との命根が相通する

を意識し又は意識せずに認知するにありと云へり。此の多少の意識的直観コンシャス・インテリジェンス（直観とは殆ど云ひ得ざる感納力）が自然美の鋭き快感を喚び起こす充分の力あるは疑ひなし。而して此の關係は吾人の精神的生活の發達するに隨うて其の形狀に進歩あり又自然美の快感も之れにつれて變化を來たすところあり。自然の美を感ずるの深きはパイロンもヴォルツワルスも殆ど異なるところなし然れどもヴォルツワオルスが自然の中より觀取し得る所の悦樂はパイロンのに比して一段高尙なる原素を含有した一段靜寂にして高雅なる意識に達せる所あり。宗教的精神も一種の自然に對する愛慕者たり而して宗教的精神を有する人は世界萬般の者に通じて神の靈の充滿するを認むるなり。斯かる觀自然の相違は種類の異なるものと云はんよりは寧ろ程度の差より生ずるものと謂はざるべからず。自然界に對して森林の蒼鬱たる様を眺め蒼穹の無限なるを仰望して感ずる一種の興奮驚歎の單純なるものは宗教的感納と酷だ相類似す。然れども二者の合一を意識するの境地に達するは是れ疑ひもなく一段の進歩たることは承認せざるべからず。按ずるに自然に對する宗教的悅樂は個物と個物との相互の種々なる關係

に於ける精巧なる組織微妙なる意匠を認知するに依りて成立つものにあらす。此の關係を認知するは之れを宗教的とは云ふことを得べきも審美的感納に遠ざかること甚しきもの也。斯かる自然觀は單に宇宙を機械的に觀察するものに過ぎず隨うて宇宙を一箇の細工物と同視するの趣あり而して又造物主をば一大機械師を以て目するの傾向あるを免れざるなり。此の自然觀に比しては一段高しと云ふことを得ずば少くも一段審美的なる觀察は宇宙を以て造化手藝の結果とするよりは寧ろ神靈の生活の表現せるものと爲すにあり而して此の宇宙觀は自然に多數の人の採用するものなり。換言すれば地球は或靈體の手に依りて製造せられたるものと云はんよりは寧ろ靈體みづからの生命を發展せるものなり故に造り出だされたる物品にはあらで寧ろ産み出だされたる兒童の如し。最初に世界内部外部及びそが上部に瀰滿せるものは無意識的生活の境地を脱せず人間の靈魂ありて始めて茲に意識の妙域に達するを得たるものなり。此の意識的生活ありて宇宙の大造化の大慈悲を認知す斯くの如くして世界（人間を含めて云ふ）と造化或は之れを神といふも可なり絶對といふも可なりと意識的結合を成

就して茲に一團圓として完了するを得たり。造化とは我々人間の精神の淵源なる無限の大精神大靈體なることを發明するの境界に入れるものにて斯くして宇宙の系統よく收結せりと云ふも不可なからん。宇宙は一個の環の如くなれば何れの方面に指していづれの點より出發するも竟にそが行かんとするあらゆる點に達するを得べし。一指頭の觸るゝ所直に全法海に通ずること如斯くなれば人間の靈性は背景を窺ひて大造化を認知するを得べし即ち造化より出でたる森羅万象に面し其の中に我れ(人間の靈は是れ宇宙の靈の一端にて彼此相通ず)を深く觀ずるに依りて造化を認知する難からじ換言すれば造化の高尙なる精靈とそが慈悲とを愈、充分に意識的に認知せんと突進するに依りて神を認め得るなり而して斯く進まんとするの結果人間の精神を常に漸次新に且喜ばしき地にのぼらしむ。

右の問題を解く爲に更に一步を進めて説かざるべからざるものあり。自然界中の最下級の生活にあるものすらも(山川草木の類)至高の精神的生活と血統の聯絡を有し且は相類似するところあるが故に其の低地にあるに拘らず其の至高の

精神的生活の記號シムボールとしてはた代表として見るを得べし。自然界が人間の靈魂と對立して之れを凌がんとする最後の勢力と稱すべきは宇宙より見て至高の地位にある者(神といふも可也絶對と云ふも可なり造化と呼ぶも亦た不可なし)を標示する豫言者たるの趣あること是れなり。吾人々間の狹隘不完全なる世界は幾多の障礙あり束縛あり不調子あり且孤立の狀態(造化及び自然界に深く同感し得ぬ故に)より來たる困憊倦苦堪ふべからざるもの多々なり而して斯かるあはれなる世界は二つの平穩無事なる世界の中間にはさまれあるは奇ならずや。下級に位する自然界(人間を自然界の上級にあるものとして對照す)は一方に於いて一箇孤立の平穩世界を成し又他方に於ては何人も其れに關する或事柄をば窺ふことを得て其の全部をば最も優れたる人も竟に知るを得ざる至高の生命(神または絶對などを指す)一箇獨立の平穩世界をつくり居るなり。かゝる分離孤獨の由て來たる所以を替ふるに各々其の求むる所の目的を異にすると又餘りに明快なる分類を施すとに原因する者の如し而して智に偏して嚴に分類するの結果は人間の生活をして沒趣味の影響を被らしむるのみならず人間の事業と自然界の自由な



る生活と全く分離せしむるに至る。之れに反して自家以外に我を驅逐するものは自家を忘るゝとともにも他の雑多の生活に我が魂を宿らしむ是れ小我を抑へて大我に伸ぶるもの理想界に於ける絶對的生活とも云ふべし此の境界に入るは正しく散文の地を去りて詩の境域ポエティックに入れりを見るを得べしやがて人間と自然との關係を調和し久しき間自然が暗示しめたる豫言を實行するの運に至れるものと云ひつべし。我れを忘れて他と合體することは一個人の間に於ける單純なる性質の戀愛にても起こるべき觀念なりとす。戀愛は人生の空想に富めるうるはしき物語とも見るべし。森林を通ずる小徑は戀する人の會合に自然に依給せられ芳香薫ずる花は戀人の物語を自然に助くるの趣あり。斯かる自然の美と戀愛の温情との關係は戀愛が我れを空うして他に合する事實に由來せり。戀愛に於いて人間は他の生活即ち我が愛する者の生活の中に自家の眞生涯あるを認むるにあらざや。如斯くして一個人の生活はそれが狹隘なる制限を破却し了して自他の障壁を撤し更に擴大せられたる生活に入るを得べし是れ散文の境域を去りて詩の境域に踏みこめるものと云ふべし。こゝに至りては自然界の一段ひろき生活自

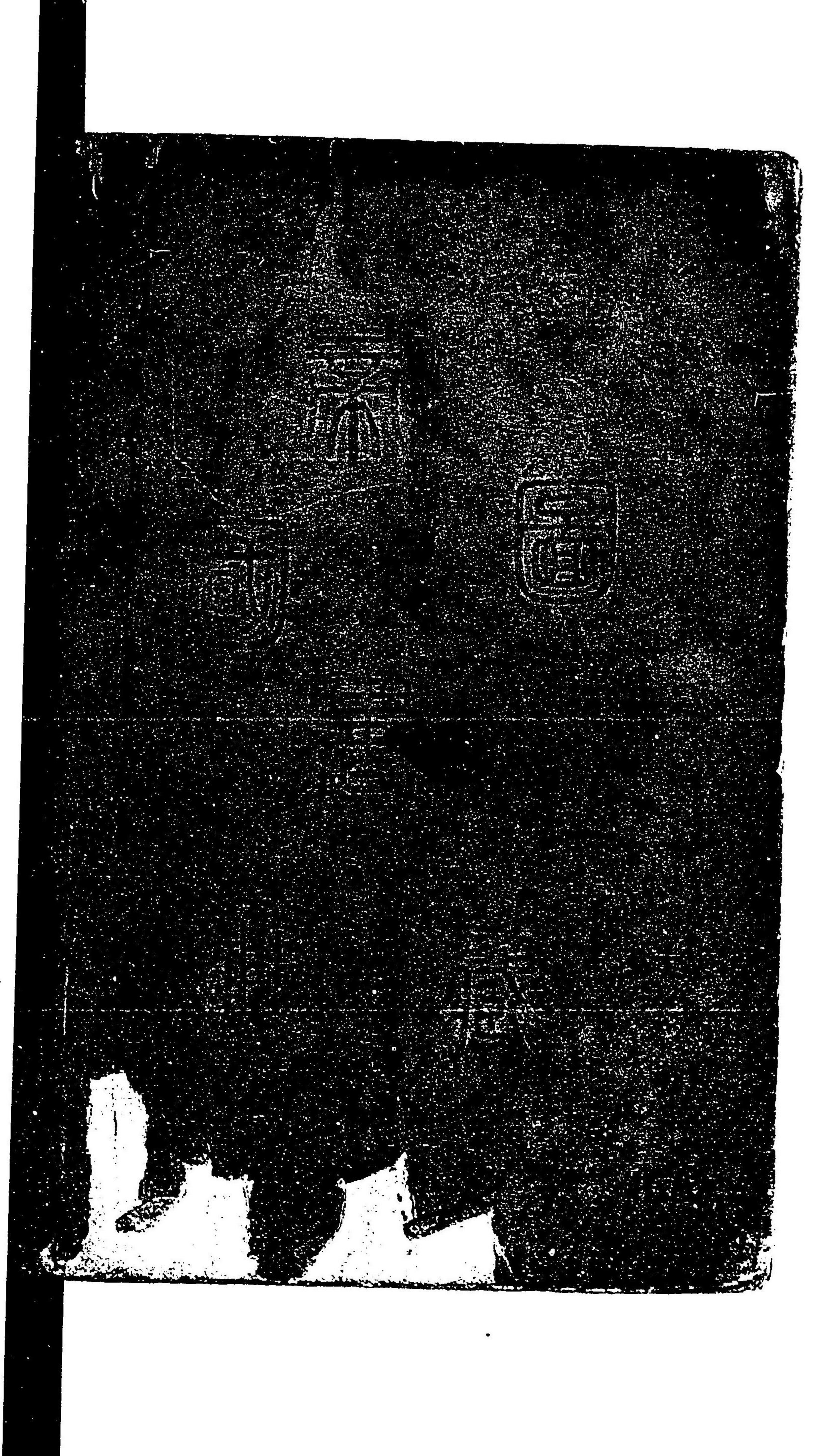
他物我の別漸く没し去るの趣あればの一部と我れをなせるものと云ひ得べし。物我の別を超脱して個人と自然と融化渾圓の境地を思ひ偕て蹴りて人間の精神がそれが狹隘なる制限の充分なる脱離を有形に現じたる彼の神廟佛閣の類ひが自然の山水などに程よく調和する所以を考ふれば前より一段明瞭に會得するを得べし。斯く充分に精神の意識を表現せる點に於て自然界の靜穩と此の靜穩と踏臺とし記號として立つ更に高等なる靜穩が相調和す。

詩と自然との關係は以上論ずるところにて既につきたり。吾人は自然の事物に對して優劣の別を立てんとは試みざりき唯幾多の難問を打破し來たりて吾人が自然を愛し自然に對して愉快を感ずる所以を推究して其の理を明にせんと力めたりき。而して其の理由をば第一、多少意識して自然界の生活に於ける自由を認むること第二、吾人々間界の生活と自然界の生活と融化合一すること第三、自然界の生活の豊富にして圓滿なること第四、自然界の莊嚴にして神々しきこと第五、吾人が希望して而も尙達し得ざる圓滿無缺の境界を豫表して見するの趣あること等に歸するを得べきを知り得たり。吾人が自然を謳歌詠し之れを愛し之れを

樂む所以のもの要するに右の五箇條の理由に外ならざるを見るべし。

附言 文學の大體を講じ終るには尙劇詩の方面を窺ふの必要あれども紙數にも制限あり時間にも制限ありて今はそれ等に論及し難し若し他日「劇詩論」を講ずることあらば此の篇に漏らせるを其所にて補ふこととすべし。

文學綱要終



205313-000-7

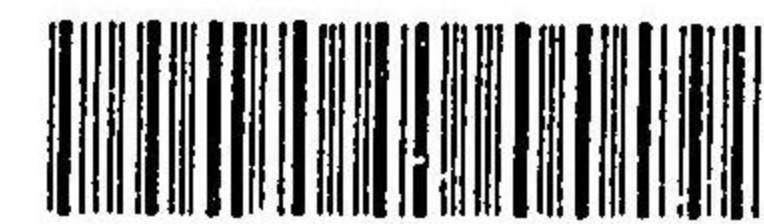
62-350

文学綱要

後藤 寅之助/述

[刊年不明]

EDV-0483



62  
350

東京專門學校  
國語文藝科  
二年級講義  
文學綱要  
後藤寅次郎

